

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：景観建築学科

資格：教授

氏名：上町 あずさ

研究分野	研究内容のキーワード
農学 生物学	観賞・景観環境植物、遺伝子解析技術、資源植物開発利用、分類形質、系統、生理生態
学位	最終学歴
博士（学術）、農学修士、農学士	京都府立大学大学院 生命環境科学 研究科 環境科学専攻 博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪産業大学デザイン工学部 非常勤講師	2017年4月～2019年3月	「フィールドプラクティス1」「フィールドプラクティス2」「フィールドスタジオ演習1」「フィールドスタジオ演習2」
2. 常磐会短期大学幼児教育科 兼任講師	2014年4月～2019年3月	「子どもと植物」
3. 滋賀大学教育学部 非常勤講師	2012年4月～2013年9月	「栽培学」「栽培実習Ⅰ」「栽培実習Ⅱ」
4. 金城大学社会福祉学部 非常勤講師	2009年9月～2018年3月	「園芸論」「ガーデニング」「園芸療法論」「園芸療法実習」
5. 京都文教短期大学家政学科 非常勤講師	2008年4月～2009年9月	「ガーデニング論」
6. 徳島文理大学人間生活学部 非常勤講師	2003年4月～2013年3月	「ガーデンデザイン論」
7. 平安女学院大学生生活環境学部、生活福祉学部 非常勤講師	2003年4月～2012年3月	「ガーデンデザイン」「ガーデンデザイン演習」「ランドスケープデザイン」「ガーデンデザイン演習」「園芸総論」「ガーデニング演習」「園芸療法論」「園芸療法実習」
8. 平安女学院大学生生活環境学部、生活福祉学部 非常勤講師	2003年4月～2012年3月	「ガーデンデザイン」「ガーデンデザイン演習」「ランドスケープデザイン」「ガーデンデザイン演習」「園芸総論」「ガーデニング演習」「園芸療法論」「園芸療法実習」
9. 甲子園短期大学家政科、幼児教育科 非常勤講師	2003年4月～2007年3月	「園芸A」「園芸B」「ガーデニングⅠ」
10. 平安女学院短期大学生生活学科 非常勤講師	2000年4月～2003年3月	「ガーデンデザイン」「ガーデンデザイン演習」「住生活特論」
11. 甲子園短期大学家政学科 非常勤講師	1999年9月～2000年3月	「園芸コミュニケーション」
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 改良普及員資格(農業)	1992年10月8日	兵庫県 平成4年度 第5号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. (公財)兵庫県園芸・公園協会 花と緑のまちづくりセンター企画運営懇話会委員	2013年～2016年	「春まで楽しめる寄せ植え」
2. 兵庫県阪神南県民局 阪神南地域ビジョン委員会主催「園芸療法講座」講師	2004年9月16日	
3. 平安女学院大学学園祭公開講座講師	2004年～2007年	
4. 平安女学院大学公開講座講師	2002年10月12日	
5. 淡路花博ジャパンフローラ2000「第13回国際コンテスト」審査員	2000年8月12日	
6. 産経新聞夕刊「ガーデニングガイド 花・緑・人」連載記事執筆	1999年10月～2000年3月	
4 その他		
1. 日本緑化工学会学会賞(論文賞)	2013年9月	「テイカカズラ類の分類体系の整理と交雑の可能性に関する研究」

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 都市緑化植物テイカカズラ類の分類および交雑に関する研究	単	2011年3月	京都府立大学博士（学術）	緑化植物として利用される植物のうち、近年流通と利用が広がっているにもかかわらず、基礎的知見に乏しいテイカカズラ類(<i>Trachelospermum</i> spp.)を取り上げた。テイカカズラ類の適切かつ効果的な利用に寄与することを目的とし、テイカカズラ類数種の識別と類縁関係の探索を行った。また、テイカカズラ類の交雑の可能性を調査し、生物多様性にも配慮した今後の都市緑化での植栽の指針を探る一助とした。(京都府立大学 学術博第29号)
2. 都市緑化植物テイカカズラ類の分類および交雑に関する研究	単	2011年3月	京都府立大学博士（学術）	緑化植物として利用される植物のうち、近年流通と利用が広がっているにもかかわらず、基礎的知見に乏しいテイカカズラ類(<i>Trachelospermum</i> spp.)を取り上げた。テイカカズラ類の適切かつ効果的な利用に寄与することを目的とし、テイカカズラ類数種の識別と類縁関係の探索を行った。また、テイカカズラ類の交雑の可能性を調査し、生物多様性にも配慮した今後の都市緑化での植栽の指針を探る一助とした。(京都府立大学 学術博第29号)
3 学術論文				
1. Morphological and molecular studies of natural hybridization between <i>Trachelospermum asiaticum</i> and <i>Trachelospermum jasminoides</i> (Apocynaceae) in Japan. (査読付)	共	2016年10月	Acta Phytotax. Geobot., 67(3) : 159-174.	国内に自生するテイカカズラとケテイカカズラの交雑の実態を明らかにすることを目的とし、形態調査および遺伝子解析を行った。博物館所蔵のさく葉標本および採取した自生個体の形態を調査した結果、テイカカズラとケテイカカズラの中間的な形態を示す個体が確認された。さらに、核DNAのITS領域の塩基配列解析およびPCR-RFLP解析の結果からもテイカカズラとケテイカカズラの自然交雑が示された。また、形態からはケテイカカズラと同定されたにもかかわらず、PCR-RFLP解析では雑種のバンドパターンを示す個体が確認され、かなり広範囲かつ高頻度で両種の自然交雑が起こっている可能性が示唆された。 Uemachi, A & W. Fukui (論文全般を担当)
2. Morphological and molecular studies of natural hybridization between <i>Trachelospermum asiaticum</i> and <i>Trachelospermum jasminoides</i> (Apocynaceae) in Japan. (査読付)	共	2016年10月	Acta Phytotax. Geobot., 67(3) : 159-174.	国内に自生するテイカカズラとケテイカカズラの交雑の実態を明らかにすることを目的とし、形態調査および遺伝子解析を行った。博物館所蔵のさく葉標本および採取した自生個体の形態を調査した結果、テイカカズラとケテイカカズラの中間的な形態を示す個体が確認された。さらに、核DNAのITS領域の塩基配列解析およびPCR-RFLP解析の結果からもテイカカズラとケテイカカズラの自然交雑が示された。また、形態からはケテイカカズラと同定されたにもかかわらず、PCR-RFLP解析では雑種のバンドパターンを示す個体が確認され、かなり広範囲かつ高頻度で両種の自然交雑が起こっている可能性が示唆された。 Uemachi, A & W. Fukui (論文全般を担当)
3. 国内に流通している緑化用テイカカズラ類 (<i>Trachelospermum</i> Lem.) 種苗のPCR-RFLP法による識別 (査読付)	共	2015年8月	日本緑化工学会誌, 41(1) : 151-156.	国内に流通している緑化用テイカカズラ類をPCR-RFLP法により解析した。その結果、rpl16イントロンのPCR-RFLP解析により中国産の <i>T. jasminoides</i> を国内産の <i>T. asiaticum</i> および <i>T. jasminoides</i> から識別できた。しかし、ITS領域の解析では、ゲノム内多型の為、両種間の雑種と <i>T. jasminoides</i> の識別が困難であった。また、形態調査では両種の中間的な形態を持つ個体は確認できなかった。 上町あずさ・福井亘 (論文全般を担当)
4. 国内に流通している緑化用テイカカズラ類 (<i>Trachelospermum</i> Lem.) 種苗のPCR-RFLP法による識別 (査読付)	共	2015年8月	日本緑化工学会誌, 41(1) : 151-156.	国内に流通している緑化用テイカカズラ類をPCR-RFLP法により解析した。その結果、rpl16イントロンのPCR-RFLP解析により中国産の <i>T. jasminoides</i> を国内産の <i>T. asiaticum</i> および <i>T. jasminoides</i> から識別できた。しかし、ITS領域の解析では、ゲノム内多型の為、両種間の雑種と <i>T. jasminoides</i> の識別が困難であった。また、形態調査では両種の中間的な形態を持つ個体は確認できなかった。 上町あずさ・福井亘 (論文全般を担当)
5. RAPD法によるテイカカズラ属 (<i>Trachelospermum</i> Lem.) 種苗の分類と交雑個体の検出 (査読付)	共	2013年9月	日本緑化工学会誌, 39(1) : 9-14.	国内には日本に自生するテイカカズラ、ケテイカカズラおよび中国などを原産地とするトウキョウチクトウの3系統が流通している。RAPD法によりこれら3系統を識別する指標を得た。得られた指標を利用し、緑化用種苗や園芸品種の識別を行った。さらに、テイカカズラ類を混植している圃場で得られた種子由来の後代をRAPD法により雑種検定した。その結果、テイカカズラとケテイカカズラとの交雑個体が検出され、緑化の現場でテイカカズラ類が自生種と交雑する可能性が示唆された。 上町あずさ・福井亘・下村孝 (論文全般を担当)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
6. RAPD法によるテイカカズラ属 (Trachelospermum Lem.) 種苗の分類と交雑個体の検出 (査読付)	共	2013年9月	日本緑化工学会誌, 39(1) : 9-14.	国内には日本に自生するテイカカズラ, ケテイカカズラおよび中国などを原産地とするトウキョウチクトウの3系統が流通している。RAPD法によりこれら3系統を識別する指標を得た。得られた指標を利用し, 緑化用種苗や園芸品種の識別を行った。さらに, テイカカズラ類を混植している圃場で得られた種子由来の後代をRAPD法により雑種検定した。その結果, テイカカズラとケテイカカズラとの交雑個体が検出され, 緑化の現場でテイカカズラ類が自生種と交雑する可能性が示唆された。 上町あずさ・福井亘・下村孝 (論文全般を担当)
7. Molecular Phylogeny of Trachelospermum (Apocynaceae) in Japan Based on cpDNA and nrDNA Nucleotide Sequences. (査読付)	共	2013年6月	Acta Phytotax. Geobot., 64 (1) : 1-13	葉緑体DNAと核DNAのITS領域の塩基配列解析による日本産テイカカズラ類の類縁関係の探索を試みた。その結果, ITS領域の解析結果は, 従来の分類学的取扱いと一致したが, 葉緑体DNAでは, ケテイカカズラと種の異なるテイカカズラの配列が一致し, ケテイカカズラで, 交雑による葉緑体の獲得が起こっている可能性が示唆された。また, ITS領域の解析で, テイカカズラとケテイカカズラの両方の配列をゲノム内多型として持つ個体が確認され, 両者が自然交雑している可能性が示唆された。 Uemachi, A & T. Shimomura (論文全般を担当)
8. Molecular Phylogeny of Trachelospermum (Apocynaceae) in Japan Based on cpDNA and nrDNA Nucleotide Sequences. (査読付)	共	2013年6月	Acta Phytotax. Geobot., 64 (1) : 1-13	葉緑体DNAと核DNAのITS領域の塩基配列解析による日本産テイカカズラ類の類縁関係の探索を試みた。その結果, ITS領域の解析結果は, 従来の分類学的取扱いと一致したが, 葉緑体DNAでは, ケテイカカズラと種の異なるテイカカズラの配列が一致し, ケテイカカズラで, 交雑による葉緑体の獲得が起こっている可能性が示唆された。また, ITS領域の解析で, テイカカズラとケテイカカズラの両方の配列をゲノム内多型として持つ個体が確認され, 両者が自然交雑している可能性が示唆された。 Uemachi, A & T. Shimomura (論文全般を担当)
9. 緑化用および観賞用植物として流通しているテイカカズラ属 (Trachelospermum Lem.) 園芸品種の分類 (査読付)	共	2009年8月	日本緑化工学会誌35(1) : 75-80	国内にはキョウチクトウ科テイカカズラ属の園芸品種が流通している。しかし, 園芸品種と原種との類縁関係は解明されておらず, 品種の分類に関するまとまった報告も無い。本研究では国内で流通しているテイカカズラ類園芸品種35種類を収集し, 生殖器官および栄養器官の形態調査を行い, これまでに明らかにされているテイカカズラ類原種の形態と比較した。その結果, 品種の由来が明らかになった。また, 生産, 流通時における品種名の混乱の実態が明らかとなった。 上町あずさ・下村孝 (論文全般を担当)
10. 緑化用および観賞用植物として流通しているテイカカズラ属 (Trachelospermum Lem.) 園芸品種の分類 (査読付)	共	2009年8月	日本緑化工学会誌35(1) : 75-80	国内にはキョウチクトウ科テイカカズラ属の園芸品種が流通している。しかし, 園芸品種と原種との類縁関係は解明されておらず, 品種の分類に関するまとまった報告も無い。本研究では国内で流通しているテイカカズラ類園芸品種35種類を収集し, 生殖器官および栄養器官の形態調査を行い, これまでに明らかにされているテイカカズラ類原種の形態と比較した。その結果, 品種の由来が明らかになった。また, 生産, 流通時における品種名の混乱の実態が明らかとなった。 上町あずさ・下村孝 (論文全般を担当)
11. 近畿中部自生株および流通株を用いたテイカカズラ属の簡易同定法の検討 (査読付)	共	2008年8月	日本緑化工学会誌34(1) : 115-120	テイカカズラ類2種1変種を同定するための簡易な指標を明らかにすることを目的とし, 近畿中部に自生しているテイカカズラ類および国内に流通しているテイカカズラ類の栄養器官の形質を調査した。その結果, 成熟相のテイカカズラ, ケテイカカズラおよびトウキョウチクトウを栄養器官の外観により簡易に同定することが可能となった。また, テイカカズラおよびケテイカカズラの成熟相と幼若相の形質の相違点を明らかにした。 上町あずさ・下村孝 (論文全般を担当)
12. 近畿中部自生株および流通株を用いたテイカカズラ属の簡易同定法の検討 (査読付)	共	2008年8月	日本緑化工学会誌34(1) : 115-120	テイカカズラ類2種1変種を同定するための簡易な指標を明らかにすることを目的とし, 近畿中部に自生しているテイカカズラ類および国内に流通しているテイカカズラ類の栄養器官の形質を調査した。その結果, 成熟相のテイカカズラ, ケテイカカズラおよびトウキョウチクトウを栄養器官の外観により簡易に同定することが可能となった。また, テイカカズラおよびケテイカカズラの成熟相と幼若相の形質の相違点を明らかにした。 上町あずさ・下村孝 (論文全般を担当)
13. テイカカズラ属数種の花の形態による同定の試み (査読付)	共	2007年8月	日本緑化工学会誌33(1) : 105-110	テイカカズラ類は付着と巻き付きの双方で登攀できるため, 優れた立面緑化素材として期待できる。わが国では, テイカカズラ, ケテイカカズラおよびトウキョウチクトウの和名を持つ3種類が流通するが,

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
14. テイカカズラ属数種の花の形態による同定の試み (査読付)	共	2007年8月	日本緑化工学会誌33(1) : 105-110	利用現場では種名の混同がある。本研究では、花器を指標として、テイカカズラ類3種の同定の手法を探究した。国内外の図鑑類の記載内容を調査するとともに、採取したテイカカズラ類の花器の形態観察を行った。その結果、花器の形態により3種類を明確に区別する指標を明らかにした。 上町あずさ・下村孝 (論文全般を担当)
15. 家庭における室内緑化植物の利用実態と利用者の意識 (査読付)	共	2007年3月	人間・植物関係学会雑誌6 : 31-39	テイカカズラ類は付着と巻き付きの双方で登攀できるため、優れた立面緑化素材として期待できる。わが国では、テイカカズラ、ケテイカカズラおよびトウキョウチクトウの和名を持つ3種類が流通するが、利用現場では種名の混同がある。本研究では、花器を指標として、テイカカズラ類3種の同定の手法を探究した。国内外の図鑑類の記載内容を調査するとともに、採取したテイカカズラ類の花器の形態観察を行った。その結果、花器の形態により3種類を明確に区別する指標を明らかにした。 上町あずさ・下村孝 (論文全般を担当)
16. 家庭における室内緑化植物の利用実態と利用者の意識 (査読付)	共	2007年3月	人間・植物関係学会雑誌6 : 31-39	人々の居住空間における室内緑化植物の利用実態および室内緑化に対する意識を戸建て住宅と集合住宅の住民を対象に、アンケートにより調査した。室内に植物を置きたいという希望があるにもかかわらず、採光や日当たりなどの環境要因により、置くことが困難な場合が多いこと、栽培管理についての不安が室内植物を置いていない主要な要因にもなっていることを明らかにした。各室内空間の環境に合う植物の提案やその栽培管理方法の解明と普及が課題であると考えられた。 下村孝・黒宮ゆかり・上町あずさ (実験結果のとりまとめと論文執筆を担当)
17. A pseudoembryo highly stainable with toluidine blue 0 may induce fruit growth of parthenocarpic tomato. (査読付)	共	2004年5月	Acta Horticulturae 637 : 213-221	人々の居住空間における室内緑化植物の利用実態および室内緑化に対する意識を戸建て住宅と集合住宅の住民を対象に、アンケートにより調査した。室内に植物を置きたいという希望があるにもかかわらず、採光や日当たりなどの環境要因により、置くことが困難な場合が多いこと、栽培管理についての不安が室内植物を置いていない主要な要因にもなっていることを明らかにした。各室内空間の環境に合う植物の提案やその栽培管理方法の解明と普及が課題であると考えられた。 下村孝・黒宮ゆかり・上町あずさ (実験結果のとりまとめと論文執筆を担当)
18. A pseudoembryo highly stainable with toluidine blue 0 may induce fruit growth of parthenocarpic tomato. (査読付)	共	2004年5月	Acta Horticulturae 637 : 213-221	非単為結果性トマト品種に開花後の処理時期を変えてオーキシン処理し、果実肥大と偽胚の発達には密接な関係があることを明らかにした。また、極めて単為結果性の高い品種では開花前に果実肥大が開始するが、その際にも同時に偽胚が発達していることがわかった。さらに着果後肥大しない系統において、偽胚の発達が停止していることが明らかとなった。 Kataoka, K., Okita, H., Uemachi, A. and Yazawa, S. (計画、実験、考察の半分を担当)
19. Effect of endogenous gibberellins in the early stages of fruit growth and development of the 'Severianin' tomato. (査読付)	共	2004年1月	Journal of Horticultural Science & Biotechnology 79 : 54-58	非単為結果性トマト品種に開花後の処理時期を変えてオーキシン処理し、果実肥大と偽胚の発達には密接な関係があることを明らかにした。また、極めて単為結果性の高い品種では開花前に果実肥大が開始するが、その際にも同時に偽胚が発達していることがわかった。さらに着果後肥大しない系統において、偽胚の発達が停止していることが明らかとなった。 Kataoka, K., Okita, H., Uemachi, A. and Yazawa, S. (計画、実験、考察の半分を担当)
20. Effect of endogenous gibberellins in the early stages of fruit growth and development of the 'Severianin' tomato. (査読付)	共	2004年1月	Journal of Horticultural Science & Biotechnology 79 : 54-58	単為結果性品種トマト 'Severianin' の果実肥大における内生ジベレリンの影響を調査した。ジベレリン生合成阻害剤を処理すると果実重が小さくなり、ジベレリン生合成阻害剤処理後にジベレリンを処理すると回復した。しかし、開花後3日目にジベレリン生合成阻害剤を処理し、その2日後にジベレリンを処理した区では果実肥大が抑制された。これにより、果実肥大には、肥大初期の内生ジベレリンが重要であることが示唆された。 Kataoka, K., Uemachi, A., Nonaka, M. and Yazawa, S. (計画、実験、考察の大部分を担当)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
21. Fruit growth and pseudoembryo development affected by uniconazole, an inhibitor of gibberellin biosynthesis, in pat-2 and auxin-induced parthenocarpic tomato fruits. (査読付)	共	2003年3月	Scientia Horticulturae 98: 9-16.	理した区では果実肥大が抑制された。これにより、果実肥大には、肥大初期の内生ジベレリンが重要であることが示唆された。 Kataoka, K., Uemachi, A., Nonaka, M. and Yazawa, S. (計画、実験、考察の大部分を担当)
22. Fruit growth and pseudoembryo development affected by uniconazole, an inhibitor of gibberellin biosynthesis, in pat-2 and auxin-induced parthenocarpic tomato fruits. (査読付)	共	2003年3月	Scientia Horticulturae 98: 9-16.	単為結果性品種トマトおよびオーキシン処理した非単為結果性品種トマトを用いて、単為結果時の偽胚の形態的变化を観察した。偽胚は珠皮最内層の分裂により、胚のう内に形成された。ジベレリン生合成阻害剤により偽胚の発達および果実肥大が抑制されたがジベレリン処理により回復した。以上により偽胚の発達と単為結果果実の肥大の密接な関係が示唆された。 Kataoka, K., Uemachi, A. and Yazawa, S. (計画、実験、考察の大部分を担当)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 木本性つる植物テイカカズラ類の生育特性	共	2016年9月	日本緑化工学会第47回大会 研究交流発表会ポスターセッション (京都府立大学)	テイカカズラ類のシュートの伸長形態およびシュートからの発根状態を調査した。成熟相の個体では登攀の際に付着と巻き付きの両方の伸長形態が見られた。巻き付きの際にも気根の発生する場合があったが、気根が対象物に付着している例は少なかった。また、1本のシュートが付着から巻き付きへ移行している事例が確認できた。着花の状況を比較すると、下垂や巻き付きで着花が多く、匍匐では少なかった。また、付着登攀しているシュートには着花が見られなかった。 上町あずさ・福井 亘・岡田準人 (発表全般を担当)
2. 国内に流通している緑化用テイカカズラ類 (Trachelospermum Lem.) 種苗のPCR-RFLP法による識別 (査読付)	共	2015年8月	第46回日本緑化工学会大会 ポスターセッション (日本大学)	学術論文2 日本緑化工学会誌, 41(1): 151-156. 参照 上町あずさ・福井亘 (発表全般を担当)
3. 国内に自生するテイカカズラとケテイカカズラ間の自然交雑	共	2014年3月	日本植物分類学会第13回大会 (熊本大学)	国内に自生するテイカカズラとケテイカカズラの交雑の実態を明らかにすることを目的とし、形態調査およびITS領域の配列の違いを利用したRFLP (Restriction Fragment Length Polymorphism) 分析を行った。その結果、テイカカズラとケテイカカズラは自生域が重なる地域において自然交雑している可能性が高いことが示唆された。 上町あずさ・福井亘 (発表全般を担当)
4. RAPD法によるテイカカズラ属 (Trachelospermum Lem.) 種苗の分類と交雑個体の検出 (査読付)	共	2013年9月	第44回日本緑化工学会大会 口頭発表 (鳥取大学)	学術論文3 日本緑化工学会誌, 39(1): 9-14. 参照 上町あずさ・福井亘・下村孝 (発表全般を担当)
5. 大学生を対象とした草花あそび体験のアンケート調査	共	2011年9月	第69回日本農業教育学会講演会 口頭発表 (島根大学)	大学生を対象に草花あそび体験についてのアンケートを行った。その結果、知っている草花あそびは平均8.6種類であり、女性の方がよく知っていた。また、教わった人は「友達」に次いで「幼稚園・小学校等の先生」が多く、幼稚園や小学校などでの教育も草花あそびの伝承に大きな役割を担っていることが示された。また、遊んだ場所は「公園」と「幼稚園・保育園・小学校等」が多く、身の回りの自然と触れる場所として、公園や幼稚園、保育園、小学校等が重要であることが示された。 上町あずさ・加藤博・畠紀子 (発表全般を担当)
6. Molecular phylogeny of the genus Trachelospermum in Japan based on RAPD analysis and the nucleotide sequences of cpDNA and nrDNA.	共	2011年3月	日本植物分類学会第10回大会および日中韓3国シンポジウム ポスターセッション (筑波大学)	RAPD解析および葉緑体DNAと核リボソームDNAのITS領域の塩基配列解析による日本産テイカカズラ類の類縁関係の探索を試みた。その結果、RAPD解析では、従来の系統学的分類とほぼ一致した。また、ITS領域の解析結果も、従来の分類学的取扱いと矛盾しなかった。しかし、葉緑体DNAの解析では、ケテイカカズラと種の異なるテイカカズラの配列が一致し、ケテイカカズラにおいて、交雑による葉緑体の獲得が起こっている可能性が示唆された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
7. Identification of <i>Trachelospermum asiaticum</i> and <i>T. jasminoides</i> using RAPD analysis.	共	2010年8月	第28回国際園芸学会 ポスターセッション（ ポルトガル，リスボン）	Uemachi, A. and Shimomura T.（発表全般を担当） キョウチクトウ科のテイカカズラ類は国内にも自生する植物であり、緑化植物のとして有用である。しかし、テイカカズラ、ケテイカカズラおよびトウキョウチクトウの3系統が景観植物としての利用の際、しばしば混同されている。これらをRAPD解析し、3系統の同定に利用できる系統特異的なバンドを見いだした。また、この系統特異的なバンドを利用し、国内に流通している緑化用種苗および斑入り品種の系統を明らかにした。
8. 緑化用および観賞用植物として流通しているテイカカズラ属 (<i>Trachelospermum</i> Lem.) 園芸品種の分類 (査読付)	共	2009年8月	第40回日本緑化工学会 大会 ポスターセッション (淡路夢舞台国際 会議場)	Uemachi, A. and Shimomura T.（発表全般を担当） 学術論文5 日本緑化工学会誌35(1) : 75-80. 参照 上町あずさ・下村孝（発表全般を担当）
9. 近畿中部自生株および流通株を用いたテイカカズラ属の簡易同定法の検討 (査読付)	共	2008年8月	ELR2008福岡（三学会合 同大会）ポスター発 表（福岡大学）	学術論文6 日本緑化工学会誌34(1) : 115-120. 参照 上町あずさ・下村孝（発表全般を担当）
10. テイカカズラ属数種の花の形態による同定の試み (査読付)	共	2007年8月	第38回日本緑化工学会 大会 ポスターセッ ション（京都大学）	学術論文7 日本緑化工学会誌33(1) : 105-110. 参照 上町あずさ・下村孝（発表全般を担当）
11. Research of students on how many plants they know before and after practical training.	共	2004年6月	第8回人間・植物学国際 シンポジウム（兵庫 立淡路夢舞台国際会 議場）	園芸実習を履修する短大生を対象に実習前後にどれだけ植物名を書くことができるか調査を行った。実習前より実習後でより多くの植物名を書くことができた。特に実習で用いた植物はほとんどの学生が名前を挙げる事ができ、実習の効果が認められた。また、スマイレ、サクラなど日本に古くからある植物やチューリップ、アサガオ、ヒマワリなど幼稚園や小学校で扱われる植物が多く挙げられた。
12. A pseudoembryo with highly stainable cells induces fruit growth of parthenocarpic tomato.	共	2002年8月	第26回国際園芸学会（ カナダ，トロント）	Nagano, A. and Uemachi, A.（実験、考察の一部分を担当） 極めて単為結果性の高いトマト品種では開花前に果実肥大が開始するが、その際に同時に偽胚が発達していることがわかった。さらに着果後肥大しない系統において、偽胚の発達が停止していることが明らかとなった。この肥大しない系統にオーキシン処理を行うと、肥大および偽胚の発達が開始した。以上より、着果には珠皮最内層の肥厚が、果実肥大には偽胚の発達が必要であることが示された。 Kataoka, K., Okita, H., Uemachi, A. and Yazawa, S（計画、実験、考察の半分を担当）
13. 単為結果性トマトの偽胚発達と果実肥大	共	2001年4月	園芸学会平成13年度春 季大会 ポスター発表 （東京農業大学）	非単為結果性トマト品種に開花後の処理時期を変えてオーキシン処理し、果実肥大と偽胚の発達には密接な関係があることを明らかにした。また、極めて単為結果性の高い品種では開花前に果実肥大が開始するが、その際にも同時に偽胚が発達していることがわかった。以上より、トマトの単為結果において、偽胚が果実肥大を誘導する可能性が示唆された。 片岡圭子・置田瞳・上町あずさ・水田洋一・矢澤進（計画、実験、考察の一部分を担当）
14. トマト単為結果果実の肥大と偽胚の発育	共	1993年4月	園芸学会平成5年度春 季大会 口頭発表（筑 波大学）	単為結果性品種トマトおよびオーキシン処理した非単為結果性品種トマトを用いて、単為結果時の偽胚の形態的变化を観察した。偽胚は珠皮最内層の分裂により、胚のう内に形成された。ジベレリン生合成阻害剤により偽胚の発達および果実肥大が抑制されたがジベレリン処理により回復した。以上より偽胚の発達と単為結果果実の肥大の密接な関係が示唆された。 野坂（旧姓）あずさ・片岡圭子・矢澤進（発表全般を担当）
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 学会賞（論文賞）を受賞して（寄稿）	単	2014年2月	日本緑化工学会誌39(3) : 340-342.	これまでの一連の研究で、国内に自生しているテイカカズラとケテイカカズラの形態による識別を確立したが、緑化種苗として流通しているテイカカズラ類には、形態からは識別できない幼若相のトウキョウチクトウや外国産のケテイカカズラが含まれることが判明し、これらの識別には分子生物学的手法を用いる必要があることが明らかとなった。また、中国や朝鮮半島に自生するテイカカズラ類についても調査し、国内産テイカカズラ類との類縁関係を明らかにする必要がある。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
2. アトリウム内の光環境と植栽植物の葉緑素含量について	共	2004年3月	甲子園短期大学紀要 2:51-56	大同生命江坂ビルのアトリウムにおいて、植栽植物の葉の葉緑素計SPAD値およびクロロフィルa,b含量を測定した。その結果、SPAD値とクロロフィルa+b含量の間には高い相関がみられ、SPAD値からのクロロフィルa+b含量の推定が可能であることが明らかとなった。また、クロロフィルa/b比がアトリウム外でアトリウム内より高く、クロロフィルa/b比が弱光環境への順化の目安として利用できることが示唆された。永野明範・上町あずさ（実験、考察の一部分を担当）
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2020年6月～	日本建築学会会員
2. 2019年4月～	日本造園学会会員
3. 2014年7月～	日本緑化工学会 評議員
4. 2014年2月～	日本緑化工学会 学会誌編集委員
5. 2011年4月～2014年3月	日本農業教育学会 会員
6. 2011年4月～2014年3月	日本農業教育学会 会員
7. 2010年4月～	日本植物分類学会 会員
8. 2008年4月～2010年3月	人間・植物関係学会第9回京都大会実行委員
9. 2008年4月～2010年3月	人間・植物関係学会第9回京都大会実行委員
10. 2006年4月～	日本緑化工学会 会員
11. 2003年4月～2018年3月	人間・植物関係学会 会員
12. 2003年4月～2018年3月	人間・植物関係学会 会員